

ことばの迷い道

「青野菜」は青色？

いそべ だいご
磯部 大吾

みんぱく手話部門研究支援事務補佐員

「青」といえば、どのような色彩を連想するだろうか。人によってさまざまで、花や海、空、信号の色などがあるだろうと思っ。かつて筆者は、信号の色は緑色だけれど、「青」とよぶのは例外だと思い込んでいた。

そんな筆者にとつて、ある意味で「青」を再定義する機会となった出来事があった。筆者は数年前、手話言語学を学ぶために、香港中文大学に長期留学していた。ある日、意味論の授業において教授が「青」と板書し、これに相当する色は色彩「覧表」の色かを指してほしいと、筆者を指名した。当たり前のように青色を指したら、香港の学生が「違う」と言つて、緑色を指した。何だか頭を撃たれたような衝撃を受けた。筆者が「違うよ、それは緑色だ」と香港手話で訴えたが、香港の学生は「あなたこそ間違っている」と頑として認めてくれない。譲り合えないので、「英語の『Blue』『Green』はどっち？」と香港手話で尋ねたら、青色、緑色を指した。ふと考えてみたら、愛飲している、青、島ビールが、ラベルも瓶も緑色をしていることに気づいた。確かに香港の生徒が言ったとおりに、青、島ビールの「青」は緑色だと、我ながら妙に納得した。

漢字文化圏なら、ある程度同じ文化、あるいは同じ視点であつて当然だと思ひ込んでいた。論語とかの東洋古典にある「義」「愛」などといった抽象概念にしても、ほぼ同じ理解であるはずだと。しかし、中国語圏では「青」は、日本でいう緑色だったことに気づき、すこく考えさせられたのだつた。

調べてみると、平安時代の「アヲ」とは青色と緑

色、両方を指していることがわかつた。「青」は幅広い色調をもっているのだ、それが頭につく語彙だけでも『日本国語大辞典』には六二〇もの項目がある。改めて「あお」を漢字であらわすと「青、蒼、碧」である。本来、「蒼」が示した色は緑色で、「碧」とは青緑色。「青」は広義的で、辞書によれば、青色、緑色、灰色、黒色、白色が含まれる。青色、緑色だけでなく、青みがかった灰色や、艶やかな黒毛を「青毛」、また「青白色」といつて青みがかった白色を意味する場合もある。

おもしろいことに、自然界において食べ物で青色のように見えるのは「青魚」のみだ。いわゆる「青野菜」、「青リンゴ」は緑色をしているし、食べ物以外の「青虫」、「青山」なんかも緑色をしている。改めて考えてみれば、青色のものといつたら、空、海、青魚、花くらいだ。いわゆる青色は、自然界では数的に稀だといえる。つまり、自然界において「青」は緑色という意味合いが強いのではないだろうか。「青」について具体的なもののみならず、抽象的なイメージを探るのもおもしろいかも知れない。「青息吐息」「青い鳥」「青臭い」「青男（あおおとこ）／あおびれおとこ」などなど。

ことばの意味を知ることば、言語の森にわけ入つて探究していくようなことではないか。とはいえず、文豪開高健の名言に「成熟するためには遠回りしなければならぬ」とある。ことばの意味や定義を知ることにより、視点が変わり、世界の見え方（理解）も変わっていくと確信している。森羅万象に対する筆者の見識は広がりつつあるけれど、まだ青「才」だ。